

## 第 58 回 Kozoom サロン 「桜の花と共生する日本人」

清水健二

2月始めの春分から3月下旬の彼岸の日までの期間、その年の気象状況によって桜の開花が決まるようである。今年は冬の寒さが続いたと思ったら、急に初夏の気温になり、また寒さが来て関東から以北の各地で積雪に見舞う日もあって目まぐるしい日が多かった。桜の開花が遅いと言われながら、急に暖かくなって一斉に咲き始めた。今年は桜前線は南から北へ移動せず地域ごとにランダムに咲き始めた感があった。とにかく開花の日を知らせる情報が飛び交う。連日桜だよりもTVなどで話題になり、毎年どうしてそんなに開花が気になるのか不思議に思っている。日本人の桜好きは昔から変わらず、桜とどんな付き合いをしてきたのか知りたくなって、色々調べてみると、日本人には昔から桜への愛着の遺伝子が刷り込まれているように思え、並々ならぬものがあるように感じた。

古代から日本に自生していた桜は、ヤマザクラと、エドヒガンが固有の品種で、日本の気候や環境に適応しながら進化し多品種が生まれた。現在ソメイヨシノが普及拡大しているが、江戸期に人工的に作られた品種だそうである。日本中どこへ行ってもソメイヨシノの花は、日常生活の中に溶け込み、春の明るい光を受けて緑葉が出る前に、淡いピンクに染まった花は春の息吹を感じさせて、心癒やしてくれるからであろう。

古くから和歌や俳句に詠まれ、人々の心や人生観と結びついてきた。奈良時代以前には、梅の花が好まれているが、「万葉集」には桜を読んだ歌がある。「花見の宴」となると、平安時代に嵯峨天皇が「花苑の節」で詠まれた 「和風 数重り（しばしばしきり）て 百花開

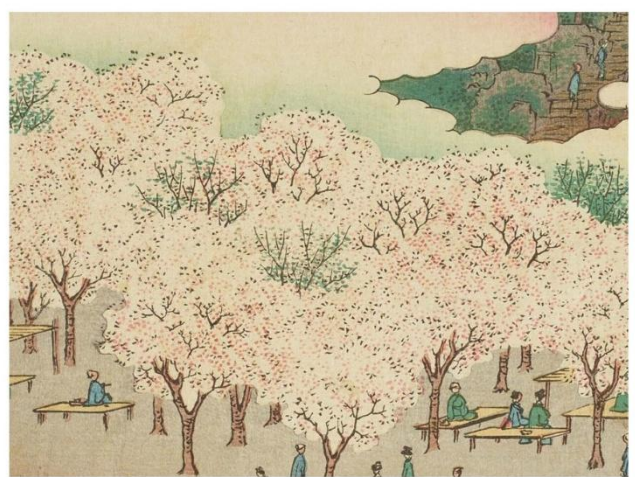
く」 が、史書「日本後紀」に残る最も古い桜の満開記録だそうである。源氏物語にも光源氏が花見の宴で、おぼろ月夜を眺めた記述がある。貴族たちの優雅な桜の花を愛でた様子うかがえる。

古今和歌集には

「ひさかたの 光のどけし春の日に しず心なく 花の散るらむ」(紀友則)

「みよしのの 山辺に咲けるさくら花 雪かとのみぞ あやまたれける」(紀貫之)

当時すでに奈良吉野山は桜の名所になっていたであろう。 鎌倉時代には武士たちは、桜の散り際の美しさを武士道精神と重ねて特別の思いを桜に託したようである。江戸時代に入って、花見は庶民化したことで、各地に植樹されて名所づくりをしたことから、日本中に広がっていった。松尾芭蕉や与謝蕪村らは俳句に桜の花を多く詠んでいるし、葛飾北斎や歌川広重は浮世絵を描き、桜



桜図（歌川広重）



桜と富士（葛飾北斎）



朧月（東山魁夷）

文化が確立していったと言えよう。

戦時中は兵士達へ散る美しさを強調して、国のために死を美化する教育に利用されたが、桜は日本



仁和寺の夜桜(平山郁夫)

人の美意識や無情観と響き合うところが、千年に及び愛され続けられてきたと言えようか。

現代の日本画家で東山魁夷や平山郁夫などは桜の花の華やかさより、もの静かな佇まいを描いている。

何よりも日本の四季の移ろいの中で、自然と共生してきた日本人は、現代においては「お花見」という行動が、日常生活に潤いをもたらしていることは間違いなさそうである。

先だって日本の「お花見」人気ランキングが、朝日新聞にでていたが、調査機関によって順位は多少変わるが概ね好みの場所は決まってくる。奈良県の吉野山は、ランキング1位で、人々の憧れの場所のようで、桜の花の豪華さと古代からの日本の歴史を彩る数々の事象に、心惹かれるものが備わっているからだろう。2位は大阪造幣局の通り抜けで、桜の種類は140種もあり珍しい花がみられて大変な人出となる。3位は東京上野公園、4位は京都嵐山、5位東京新宿御苑と続く。

私は山歩きが好きだったので四季折々の山を楽しんで

きた中でも、吉野山へは特に入れ込んで訪ねてきた。吉野山ほど歴史に名を残してきた桜の山はなく、「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と詠われていることを実感している。飛鳥時代に女帝持統天皇の吉野詣から始まり、源義経が兄頼朝に追われて吉野山に逃避する話、後醍醐天皇に絡む南朝の哀史、楠木正成・正行の生き様を残す如意輪寺、華やかな花見の饗宴を催した豊臣秀吉を語る吉水神社など中千本に点在している。また明治維新、尊王攘夷に走った天誅組の終焉の地として、数々の歴史物語の中には、常に桜が脇役として共演してきたように思える。



私は春の桜、秋の紅葉、冬は雪の吉野山を楽しんできた。春は下千本から始まり、中、上、そして奥と約 3 万本のヤマザクラが山深く展開する。上千本から展望するパノラマ風景は、雲海の中に蔵王堂の大きな木造建造物の大屋根が浮かびあがり素晴らしい景観である。

修験者（山伏）の吹く法螺貝の音が



吉野山下千本から「山笑う」



中千本から如意輪寺遠望



吉野山上千本から蔵王堂遠望



奥吉野 義経隠れ塔



山伏達の出陣

山々にこだまして、響きわたる非日常の世界を味わうことができる。史跡としても奥吉野には義経の隠れ塔があり、更にその先に西行庵がある。鳥羽上皇（1141）の北面の武士だった佐藤義清は、23 歳の若さで出家し西行と名のって諸国行脚の旅にでた。世を捨てた彼は、



奥吉野西行庵広場



西行法師入寂の地・弘川寺

吉野の桜に惚れ込み桜花の儂く散りゆく哀れさに心琴をゆるがせている。私の両親の里の南河内に位置する太子町の隣に河南町があり、この村の山腹に弘川寺が建っている。ここで西行法師が入寂するが、「願わくば 花の下にて春死なん そのきさらぎの 望月のころ」と詠い、その通り桜を愛でながら亡くなったという。奥吉野の西行庵や弘川寺を訪ねたが、実に訪ねる人も無く、静寂そのもので桜の花びらがひらひら散るばかりの佇まいを今も忘れられないでいる。

ヤマザクラは芽吹き出した赤い葉とともに花が咲くので、吉野の山々は濃いピンクに染まる。まさしく春の季語の如く「山笑う」が実感できる。こだまの重複する音が笑い声に聞こえるのもまた一興である。

「故郷や どちらを見ても 山笑ふ」 （正岡子規）

我等が高津高校の校章は桜であり、同窓会の「群芳」の名は、吉野山の竹林院群芳園との

ご縁があるように聞き及んでいる。「群芳」とは、(様々な美しい花が咲いている様子) とか (賢者の集い) という意味で、桜の花との関わりが濃厚である。

今年も先日、快晴で温暖な日に、大阪空港に近い服部緑地公園へ花見に出かけた。多くの花見客が来訪していたが、最近の花見の様子はすっかり変わってきていて、時代は移って行くものだなと思った。以前は花見には団体客が多く、



**家族連れの花見（服部緑地公園）**

酒を飲んで嬌声をあげたりして賑やかだった。しかしそんな風景は全くみられなかった。コロナ禍の影響からか社会全体が騒ぐ楽しみを好まなくなり、家族だけの親子で手持ちのご馳走を食べ、幼子たちと寛ぎ、あるいは若いカップルが楽しく話し合う和やかな雰囲気になっていた。高度成長期には仲間で徒党を組み、団体で事に対応する姿も希薄になって、こじんまりと自分達だけの世界を守るような時代になってきているのだろうと痛感した。

日本の春はまた別れと出会いの時期で、桜の花は一層その印象を深め日本人の心に食い込んでくる。桜は哀楽の文化として継承されてきたとも言える。一方近年のお花見は多分に「花より団子」の雰囲気にあるが、観賞だけに終わらせず、花木を材料に新しい芸術を創出して、桜文化を次代に展開して欲しいものだと思っている。